

---

# 呪いの手

春野天使

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

呪いの手

### 【Nコード】

N4977C

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

ある夏の日。小学生の美菜と一磨は、寂れた古い神社に遊びに行った。その小さなお堂には『呪いの手』と呼ばれる鬼の手が奉られているという。呪いの手を見たものは三日後に死ぬ……美菜は神社の古くからの言い伝えを信じ怖がるが、一磨は一人、小さなお堂に入っていく……。

前編（前書き）

「夏ホラー2007」参加作品です！

呪いの手

## 前編

紺野美菜は、一両編成の電車から小さな無人のプラットホームに降り立った。プラットホームを取り囲むようにそびえる山々からは、一斉にセミの鳴き声が押し寄せてくる。

美菜は鍔の広い帽子を目深に被り、手をかざして空を見上げた。山の向こうから湧き出るような入道雲。真夏の空は鮮やかな青色をしている。

あの日とちつとも変わってない。

美菜がこの小さな田舎町を訪れるのは、十数年ぶりのことだった。父方の両親が住むこの町に、夏休みになると毎年のように遊びに来ていた。だが、美菜の両親が離婚して、美菜が母親に引き取られてからは、次第に足は遠のいていった。

あの日。美菜が最後にこの町に遊びに来た年の夏、両親は離婚寸前で、いつもは三人で父親の実家を訪れていたが、とうとう母親は一緒に来なかった。

小学四年生だった美菜には、両親の離婚はかなりショックな出来事であり、楽しいはずの夏休みをずっと暗い気分で過ごしていた。

この町に来るのも今年で最後。

美菜はそう感じとり、益々心が重くなるのだった。

美菜の心が沈むのは、両親の離婚のことだけではなかった。田舎に来れなくなることで、父方の祖父母に会えなくなることで、いとこで同い年の理恵と遊べなくなることで、それらのことも寂しかったが、美菜が一番辛かったのは、沼田一磨という少年に会えなくなってしまうことだった。

一磨は美菜より二つ年上の六年生で、理恵達の遊び仲間だ。理恵やその友達の中では、いつもリーダー的存在で面倒見も良かった。

小学生の二つの年の差は、かなり大きい。美菜は一磨のことを、とても大人っぽく感じていた。彼は元々は都会育ちで、ここには小学校に上がる年に転校して来たらしい。理恵や他の友達とは違う、あか抜けた雰囲気をしていた。

理恵やその友達たちは、元気いっぱい野山を駆け回っていたが、おとなしく運動の苦手な美菜は、いつも一歩出遅れることが多かった。そんな美菜を気遣って色々と面倒をみてくれたのが一磨だった。初恋。幼い美菜が、初めて心をときめかせた相手が一磨だ。その一磨ともう会えなくなる、そう思うだけで小さな美菜の心は痛むのだった。

真つ青な空、ギラギラと照りつける太陽、山々から響いてくる蝉の声。

川で水しぶきをあげて遊ぶ、理恵やその友達たちの元気な声を聞きながら、美菜は一人木陰に座って休んでいた。麦わら帽子を被っていても突き抜けてくるような太陽の熱は、美菜の頭をクラクラさせる。みんなから離れ青白い顔でぽつんと座っていると、余計惨めな気持ちになってくる。

今年で最後なのに……。

近くに生えている草を引き抜きながら、美菜は泣きそうな気分になった。もっとみんなと楽しく遊びたい。最後に過ごす夏休みに最高の思い出を作りたい。一磨ともっと一緒にいたい……。

「ミンミン蝉の抜け殻見つけた！」

段々悲しい気持ちになっていく美菜の耳に、明るく弾んだ声が聞こえてきた。顔を上げると、一磨が蝉の抜け殻をかざして笑っていた。川で水遊びをしていた一磨は、Tシャツを脱いで半ズボンだけはいている。髪を濡らし褐色に日焼けした一磨の姿が、太陽の光でキラキラ輝いているように見えた。スラリと背の高い一磨、まだ骨格は細く華奢だが、その体は日々逞しく成長していつてるように見

える。

「気持ち悪い……」

美菜は蝉の抜け殻から目をそむけて俯いた。一磨が声をかけてくれたのは嬉しいが、美菜は虫が大嫌いだった。

「美菜ちゃん、虫が嫌いだもんなあ」

一磨は抜け殻を手の中でいじり、粉々に潰した。

「キヤ……」

カサカサという小さな音とともに、落ちていく抜け殻の粉を見て美菜はゾツとした。

「こんなのただの抜け殻だから怖がることないよ。中に入ってた蝉は今頃元気に飛び回ってるさ」

一磨は明るく笑うと、タオルで頭と体を拭いて脱ぎ捨てていたTシャツを着た。

「美菜ちゃん、気分良くなった？」

一磨は顔を伏せている美菜を覗き込むようにして聞いた。

「うん……」

本当はまだ頭がふわふわしていたが、美菜はこくりと頷いた。

「じゃあ、遊ぼうよ！」

一磨は美菜の手を引いて立ち上がらせる。

「あたし、水遊びはやだ」

麦わら帽子を押さえて、美菜は言う。美菜は何度も川で流されそうになったことがあり、水に対して恐怖を抱いていた。

「水遊びじゃないさ。もっと面白い遊び」

一磨は美菜と手を繋ぎ、スタスタと歩いていく。少しひんやりとした一磨の手を握りながら、美菜の心は次第に弾んでいった。

## 呪いの手

一磨が美菜を連れて来たのは、川の近くにある『鬼神神社』<sup>きしんじんじや</sup>という小さな神社だった。古びた石の鳥居をくぐると、長い石の階段が山の上まで続いている。そこは、山の陰になっていて真夏の太陽は

遮られ、涼しい風が吹いていた。

太陽の熱にダウンしかけた美菜にとって、火照った体を冷やすには絶好の場所だ。今までも何度か遊びに来ている。だが、美菜はこの古い神社が好きになれなかった。『鬼神』という名前が恐ろしかったし、今は誰も管理をしていない寂れた神社は、薄暗くどことなく不気味な雰囲気をおびている。石の階段を上へ上れば上るほど、空気は冷たくなり静かさが増してくる。

一磨と一緒にいなかったら、美菜は恐くてとても来ることが出来ない。ヒグラシの寂しげな鳴き声、空から聞こえる烏カラスの鳴き声にさえ、美菜はビクついていた。

しかし、一磨は大きな声で歌を歌いながら、元気に石段を登っていく。美菜は一磨の手をギュッと強く握りながら、ついていった。「何して遊ぶ？」

ようやく長い石段を登りきった美菜は、息を弾ませて尋ねた。目の前には神社の本堂とその前にお賽銭箱が置かれている。この神社にお参りに来る人はほとんどいないから、お賽銭箱はいつも空っぽだ。

「美菜ちゃん、いい？ 今から石の上しか通っちゃダメだよ」  
ふいに一磨はそう言うと、本堂に続く飛び石の上にピョンと飛び乗った。石段から本堂までは、途切れ途切れに平たい飛び石が続いていた。昔はきちんと置かれていただろう石は、今はところどころなくなっていて、石と石の間隔がかなり空いている部分もある。

「えー、あたし跳べない」

「大丈夫だよ。思いっきり跳んだら石に着地出来るから」

「石から落ちたらどうなるの……？」  
ピョンピョン跳んでいく一磨を見ながら、美菜は泣きそうな声を出す。

「落ちたら……」

大きくジャンプして次の飛び石に移った一磨は、美菜の方を振り返る。

「……地獄から鬼の手が出てきて、美菜ちゃんの足を引っ張つていく」

「……え？」

一瞬、一磨の顔から笑みが消え、鋭く睨まれた気がして美菜はゾツとした。

「ハハハ！ 美菜ちゃんは恐がりだなあ」

次の瞬間には、一磨は大笑いしていた。

「早くおいでよ！ ただのゲームなんだから」  
身軽な一磨はもうお堂の前まで来ていた。

「……」

美菜は全身の力をこめて思いっきりジャンプする。小さな美菜には、次の飛び石までの距離がとても長く感じられた。石には苔がむしっていて、ズルツと滑りそうになる。

「美菜ちゃん、早く！ おいてくよ」

「待って！」

美菜は必死でジャンプを繰り返す。石と石の間には、真っ暗な闇の世界が広がっていて、石の上から落つこちると本当に地獄の底に落ちてしまいそうな気がした。

地獄の鬼に足を取られる！

最後の石に飛び移る時、美菜は石の端に着地しバランスを崩す。真っ暗闇の下界から、今にもニュツと鬼の手が出てきて、美菜の足を掴んで引きずり込む。美菜はその光景を頭に描きパニックになる。

「助けてー！」

悲鳴に近い声を出し、美菜は一磨の体にしがみつくように倒れ込んだ。一磨の胸に顔を埋め美菜は声をあげて泣いた。

「あー！ 美菜ちゃんのせいで僕の負けだ」

「……？」

美菜が恐る恐る顔を上げると、美菜に体を押された一磨は、飛び石の上から落ちていた。

「だ、大丈夫？」

真剣な顔で心配する美菜を見て、一磨は笑った。

「僕は地獄に落ちこちた。美菜ちゃんのせいだよ」

「……ごめんなさい。鬼に足を掴まれた？」

「どうか……？」

一磨は顔から笑みを消して、自分の足に視線を移す。

「美菜ちゃんが抱きついてきたからわからない」

「あ……」

美菜は急に恥ずかしくなり、パツと一磨から体を離れた。その様子を見て、一磨は面白そうに笑った。

「美菜ちゃんはかわいいけど、まだまだ子供だね」

「……一磨君も子供だもん」

「僕は来年中学生になるんだから、大人だよ」

「美菜も、美菜だって中学生になるもん。大人だよ」

「じゃあさ」

ムキになる美菜の顔を一磨はじっと見つめる。

「『呪いの手』を見に行く？」

「え……『呪いの手』？」

美菜は口ごもり、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「で、でも、あれは見ちゃいけないよ。見たら、見たら祟りが起るんだから」

うわずった声で、美菜は必死に反対する。『呪いの手』とは、本堂の横の小さなお堂にまつられているという『鬼の手』のことだ。

昔、村人に悪さをする鬼を勇敢な若者が退治し、打ち落とされた鬼の手をまつったという。神社の名の由来にもなっているこの話は、祖母から聞いたことがある。

手を切り落とされた鬼は、今でも手を探し求めこの町をさまよっていると言われ、言うことを聞かない子供に親は、「怒った鬼が手の代わりにお前をさらいに来るよ」と叱ることがあった。おとなしい美菜は言われたことがないが、いとこの理恵は時々祖母に言われていた。

美菜はその言葉が恐ろしく、叱られたのは自分ではないのに、その晩は鬼が襲って来るんじゃないかと気が気で眠れなくなっていた。だから、ダメ。見に行っちゃダメ」

「美菜ちゃん、そんな迷信信じてるの？」

必死で一磨を説得する美菜に、一磨は軽く笑ってみせる。

「あんなの作り話さ。鬼なんかいるわけないじゃないか」

「だって……だってお堂には本当に『鬼の手』があるんだって言うてたよ。昔、その手を見た人がいて、三日後に死んだって言うてたもん」

美菜は泣きそうになりながら言う。

「そんなの嘘だ。どうせ作り物だからね。カップの手をテレビで見たことあるけど、あれは動物の手を細工したもんだって言うてたし、もし本物なら大発見だよ。テレビの取材が来るかもな」

一磨は笑いながらそう言うのと、足早に小さなお堂の方に向かっていく。

「待って……待って一磨君！」

さわさわつと山の木々が風に揺れ、湿った生温い風が美菜の髪を撫でていった。木々の間から見える空は、いつの間にか黒い雲に覆われていた。

「ダメ、ダメだよ、一磨君！」

風に飛ばされないよう麦藁帽子を手で押さえ、美菜は小走りで一磨の後についていく。

小さなお堂の前で、一磨は立ち止まり美菜の方をふり返る。

「恐かったら美菜ちゃんは来なくていいよ」

キリツとした目で美菜を見つめ、低い声で一磨は呟いた。

「……」

いつもの明るい笑顔の消えた一磨の顔がなんだか恐くて、美菜はもうそれ以上何も言えなかった。一磨はお堂の重い扉を開けると、誘い込まれるようにスツと中に入って行った。バタンツと大きな音を立てて扉が閉まる。空が益々暗くなり、生温い風が強く吹き抜

ける。

一磨君！ 戻って来て！

不吉な胸騒ぎをおぼえた美菜は、涙を流しながら心の中で叫んだ。

鬼が、鬼が襲いに来るよ！

ピカツと稲妻が走り、ゴロゴロと空がなった。美菜は悲鳴をあげて、その場につづくまる。

後編に続く……。

## 後編

一磨はなかなかお堂から出てこなかった。ほんの数秒が何時間にも感じられる。

「一磨君」

美菜は意を決し、お堂の扉に手をかけた。だが、古びた木の扉は予想以上に重くて開かない。

「一磨君！」

美菜は全身の力をこめて、扉を引いた。やがて、ギギギイと軋んだ音を立て、扉はゆっくりと開いた。

「一磨君！」

美菜は叫び、真つ暗なお堂を見渡した。ほんの三畳ほどの小さなお堂の真ん中に、一磨は正座で座っていた。手には小さな箱を持ち、魂の抜けたような顔をしてぼんやりと座っている。目は虚ろで焦点が定まっていなかった。

「一磨君、どうしたの!？」

美菜の声で、ようやく我に返った一磨は、ゆっくりと美菜の方へ顔を向けた。

「それって、もしかして……」

美菜は一磨が両手で持っていた箱に目をやる。長方形の薄汚れた箱。あれは、『呪いの手』！

「これのこと？」

一磨は薄く笑うと、美菜の方に箱を掲げた。

「やだ！」

美菜はとっさに目を瞑り、箱から顔をそむける。

「美菜ちゃん、大丈夫だよ。箱の中には何も入ってないんだ」

一磨のいつもの笑い声を聞き、美菜は恐る恐る目を開ける。一磨は箱の蓋を開け、美菜に空っぽの箱を見せた。

「『呪いの手』なんか入ってなかった。やっぱりあんなの作り話だ

「つたんだね」

「一磨はつまらなさそうにそう言つと、箱を無造作にその場に置いた。」

「本当に何も入ってなかったの……？」

「そうさ、誰かが持っていたのかもしれないけどね」

「一磨は箱を一瞥すると立ち上がった。」

「……」

美菜はホツとするが、空の箱が妙に気になった。

もしかして、鬼が手を取り戻しに来たんじゃない？

空っぽの箱を見て、美菜は逆に不安になる。

「美菜ちゃん、もう帰ろう。雨降つてきそうだし、みんなが心配してるかもしれない」 そんな美菜とは対照的に、一磨はもうすっかり『呪いの手』のことなど忘れ、お堂を出ていく。

「……うん」

美菜は空っぽの箱を残し、お堂の扉を閉めた。開ける時はあんなに重かった扉が、嘘のように軽く閉まった。

「美菜ちゃん、川まで競争だよ！」

一磨の明るい声が響く。美菜は不思議に思いながらも、走つて一磨の後を駆けていく。ピカッと、また稲妻が光った。美菜は反射的に麦わら帽子を押さえる。

「一磨君、待って！」

ゴロゴロと雷がとどろき、ポツリポツリと雨粒が落ちてきた。先に石段を駆け下りていく一磨を、美菜は必死で追いかけた。空は黒い雲で真っ暗になっている。

と、その時、美菜は何か背中に視線を感じ、ビクツとして立ち止まった。

誰！？

鋭いナイフで突き刺されたような痛みを、美菜は背中に感じる。

誰かが見てる！

悲鳴をあげそうになるのを必死で堪え、恐る恐る美菜はふり返る。

だが、後ろには薄暗いお堂がぼんやりと見えるだけ。そこには誰もいなかった。どンドン先を走って行く一磨の姿が小さくなる。

ポツポツ降っていた雨が、急に大降りになり、美菜の麦わら帽子を叩きつける。帽子を押さえたまま、美菜が石段を駆け下りようとした時、

『手・は・取・り・返・し・た』

ゴロゴロという雷の音に混じって、不気味な低い声が美菜の耳に響いてきた。

「キヤー!!!」

美菜は大声を上げ、転げるように雨に濡れる石の階段を下りて行った。

『呪いの手』を見た者は、三日後に死ぬ。

神社から帰った夜、美菜は高熱を出して寝込んだ。熱にうなされながらも、美菜はずっと一磨のことを心配していた。

一磨君は、鬼の手なんか見てない！箱の中は空っぽだったもん！一磨君は大丈夫！

美菜は必死で自分に言い聞かせたが、神社からの帰りに聞いた不気味な声と鋭い視線は、何度も何度も夢にまで見て、美菜を苦しめた。一磨は鬼の手の入った箱を開けた。その時、鬼が現れて手を持っていったのかもしれない。一磨君は鬼に殺される！

不吉な思いが、美菜の頭の中を駆けめぐる。

美菜は数日間、熱にうなされていた。

しかし、美菜の熱が下がった日の朝。美菜の心配は熱とともに消え去っていった。

「美菜ちゃん、大丈夫？」

布団の中で目を開けた時、そこに元気な一磨の笑顔があった。

「一磨君！」

美菜は掛け布団をはねのけて起きあがった。

「今日は、今日は何日!？」

美菜はカレンダーを探して、キヨロキヨロと部屋を見回す。

「八月十五日。美菜ちゃん、ずっと熱にうなされてたんだよ。みんなすごく心配してたんだ」

「八月十五日……?」

一磨と鬼神神社に行ったのは、十日。あれから五日経っている。

美菜の顔がパツと明るくなる。

「良かった! あたし、一磨君のことずっと心配してたの!」

鬼の呪いはなかった! 一磨は元気に生きている! きよとんとしている一磨を見ながら、美菜は声を立てて笑った。

それからの残りの夏休み、美菜は一磨や理恵達と元気に遊んで過ごした。一磨の様子に変化はなく、前以上に元気なくらいだ。ただ、あの日以来、一磨も美菜も『鬼神神社』には近寄らなくなった。『呪いの手』はなかったと分かり、一磨も興味をなくしたようだ。

二週間はアツという間に過ぎていき、美菜が家に帰る日がおとずれた。祖父母も理恵も来年も遊びに来てね、と言ってくれたけど、多分もう当分この町に来ることはない……父親とともに、一両編成の電車に乗り込みながら美菜はそう感じた。これからは、父に会うこともあまりなくなるのだ。そして、一磨にも……。

俯きながら美菜が電車に乗り込んだ時、

「美菜ちゃん!」

美菜の名前を叫びながら、一磨がプラットフォームに駆けてきた。

「一磨君」

美菜はふり返る。昨日の晩、理恵の家で食事会をし、一磨や他の友達たちにはお別れをした。今日一磨に会えるとは思っていなかった。大きく手を振る一磨の笑顔を見ていると、また涙が零れそうになった。

「元気でね! バイバイ!」

美菜と一磨の間で電車のドアがゆっくりと閉まる。

「バイバイ……一磨君」

涙を堪えて美菜はドアにもたれかかった。外は焼けるような太陽と雲一つない青い空。手を振る一磨の濃い影が、プラットホームに映って見えた。

「……！！」

その一磨の影を見て、美菜は悲鳴をあげそうになった。明るい笑顔で美菜に手を振る一磨。しかし、その影は一磨の姿ではなく……二本の鋭い角のはえた威めしい鬼の姿をしていた。

美菜は目を見開いたまま一磨を凝視する。声を出そうとしても声が出ない。

鬼！？ 一磨君が鬼になった！

違う！ そんな訳ない。美菜はもう一度一磨の影を確認しようとしたが、電車が静かに動きだし、影は見えなくなった。やがて、にこやかに笑う一磨を残し、電車はプラットホームから離れていった。

あの時の一磨の姿は、今でも美菜の目に焼き付いている。

美菜は、『鬼神神社』の鳥居をくくり、お堂に続く石段をゆつくりと上って行った。ここに来るのは、一磨と『呪いの手』を見に行つた日以来だ。

鬼の影をもつた一磨がその後どう過ごしたか、美菜はよく知らなかった。もしかしたら、あの影は美菜の錯覚だったのかもしれない。理恵の話では、一磨は美菜が帰った後も元気に過ごしていたという。

だが、一磨は美菜とプラットホームで別れて半年後、この神社の石段から落下して亡くなった。一磨の遺体が発見されたのは、早朝のことだったという。どうやら一磨は夜中に家を抜け出し、神社に向かったらしい。

一磨の死は、理恵の手紙で知らされた。美菜はその事実衝撃を受けたが、町を訪ねる勇氣はなかった。それから十数年。大学を卒業して就職した美菜は、お盆休みにふと思いついて祖父母の家に遊

びに来たのだった。

石段を上り終わると、本堂が姿を現した。昔と変わらない古びた本堂。そして、その脇には例の小さなお堂があった。美菜は小さなお堂を見て、ゾクツと身震いした。

やっぱり来るんじゃないか……ここは来ては行けない場所なのかもしれない。

頭上では、夏の太陽が照りつけているのに、ここは薄暗くて冷え冷えとする。だが、美菜はどうしてももう一度この場所に来てみたかった。

ここは、一磨君が命を落とした場所だから……。

もしかしたら、あの日、『呪いの手』を見に行った日に、既に一磨は命を落としていたのかもしれない。あの時、一磨は地獄に落ち鬼に魂を奪われたのではないか……？

本堂まで続く飛び石を、美菜はあの日のように一つずつ跳んで渡ってみた。ヒールの靴は跳びにくい。だが、美菜は大人になり、あの時よりずっと身長も伸びていた。弾みをつけて跳ぶと楽に飛び移れる。

だが、最後の飛び石に移ろうとした時、また苔に足を滑らせグラツとバランスを崩した。落ちたら地獄から鬼の手が伸びてきて、美菜ちゃんの足を引っ張っていく。

あの日の一磨の声を思い出し、美菜は必死でバランスを立て直したが、片足だけ石の外に出てしまった。サワサワと神社の木々が生温い風になびく。ヒグラシの悲しい鳴き声が頭上から響いてくる。

美菜は、理恵から聞いた話をふと思い出す。

「一磨君、石段から落ちたのにほとんど怪我をしてなかったのよ。眠っているような安らかな顔をしてたから、石段から落ちたとは思わなかったんですって。でもね……両足にだけくつきりと赤い痣が残っていたらしいよ」

「赤い痣……？」

「うん。何かにひつかかれたような、手の形のような痣だったんだって。まるで、誰かに強く足を掴まれて跡が残ったみたいだ」  
「誰かに足を掴まれたような……？」

それは、地獄の底から伸びてきた鬼の『呪いの手』！

『美菜ちゃんのせいだよ』

揺れる木々のざわめきの音に混じって、美菜はあの日の一磨の声を聞いたような気がした。遠くで一磨の陽気な笑い声も聞こえてくる。

『美菜ちゃんのせいで僕は地獄に堕ちたんだ』

美菜は耳を塞ぎ、その場につづくまる。美菜のまわりにまとわりつくように、生温い風が吹き付ける。

わざとじゃない！ わざとじゃないの！

『美菜ちゃんのせいで僕は』

突然、嵐のような突風が吹き、土埃を巻き上げる。

「ごめんなさい！ 一磨君！」

美菜は声に出して叫んだ。突風の後、風はピタリと止む。と、静まりかえった神社に、ギギイという不気味な音が低く響く。小さなお堂の扉がひとりでに開いた。美菜は悲鳴をあげ、扉の開いたお堂を凝視した。

『僕・は・鬼・に・な・っ・た』

幼い一磨の声は一変し、お堂の真つ暗闇の中からは、太く不気味な低い声が響いてきた……。了

呪いの手

## 後編（後書き）

読んで下さってありがとうございます！ 八月になってからようやく書き始めた作品で、「夏ホラー」に参加出来るかどうかも不安でした…。予定していた洋物ホラーを変更して、古い神社にまつわる呪いの話にしました。割と近くにこの作品に出てくるような寂れた神社があり、そのイメージを参考にしました。

猛暑の夏。少しでも涼しい気分になっていただけたらと思います。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4977c/>

---

呪いの手

2009年3月24日10時33分発行